

人類学 研究所 通信

2025 年度 第26号

巻頭言

2025 年度をふりかえって（渡部森哉）..... 1

特集

1 私の関心

エチオピアにおける宗教変容と社会変化（石原美奈子） 2

2 着任のあいさつ

着任のあいさつ（鈴木康二） 4

3 AE 編集にかんして

編集上の変革と今後の展望：Asian Ethnology における Scholastica 導入（ドーマン・ベンジャミン）... 6

4 沼澤喜市資料整理プロジェクト

沼澤喜市資料整理プロジェクト報告（2025 年度）（竹内愛） 7

沼澤喜市資料の紹介：シラバスから見る沼澤とシュミットの文化圏説との関係（小玉翔太） 9

沼澤喜市資料の紹介：考古記事への関心（伊沢吉龍） 11

活動報告 13

活動余話「台湾・小川資料の経緯の報告（続き）」（渡部森哉） 15

活動余話「3 研究所合同企画の実施」（宮脇千絵） 20

研究業績 21

刊行物 24

活動余話「日本文化人類学会でのブース出展について」（宮脇千絵） 24

スタッフ 25



南山大学人類学研究所
Anthropological Institute, Nanzan University

2025 年度をふりかえって

渡部森哉（人類学研究所・所長）

『人類学研究所通信』第 26 号をお届けする。2025 年度の活動報告である。

2025 年度は、9 月 15 日まで石原美奈子先生が所長を務め、9 月 16 日から渡部が引き継いだ。石原先生は 9 月 16 日から 1 年間、研究休暇を取得された。

2025 年度には新たに第一種研究所員（人類学博物館担当学芸員）として鈴木康二先生が加わった。人類学研究所と人類学博物館の活動が、相乗効果によってますます活発化していくことを期待したい。

2025 年度の後半には新たな共同研究「アーカイブズを通した人類学史研究」が 3 年計画で始まった。人類学研究所で保管している沼澤喜市の資料を多角的に分析することを軸として、多くの研究者が自分のフィールドの事例から参加できる内容である。この研究会のために、中生勝美先生、角南聡一郎先生、加藤英明さんに加わっていただいた。3 年計画で、毎年数回ずつ研究会を行い、共同研究の成果を『人類学研究所研究論集』として出版する予定である。また、2022 年度から 2024 年度までの共同研究「デジタル化が生み出す新たな生 / 知のあり方—記録・身体・モノ—」の成果が、『人類学研究所研究論集』第 15 号として出版された。3 年サイクルの共同研究が順調に稼働していることをうれしく思う。

定期刊行物の出版も着実に進められた。予定通り Asian Ethnology は 84 巻 1 号 2 号が刊行された。多くの投稿があり、世界的なレベルを維持できていることは喜ばしいことである。雑誌の編集や投稿管理の業務のため Scholastica というシステムの利用を開始した。うまく機能することを期待している。また『年報人類学研究』の第 16 号が出版された。外部からの投稿が増えていることをうれしく思う。雑誌のレベル向上のため、建設なコメントをしてくださる査読者に感謝申し上げたい。第 16 号には宮脇第一種研究所員が中心となって進めてきた共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」の研究成果が特集として組まれ、収録されている。またこの研究成果を検討するため、公開シンポジウム「中国・台湾における装いとエスニシティ」が開催された。

公開講演会が 2 回実施された。1 回目「パプアニューギニアの新聖人—戦前・戦中・戦後 80 年のその先へ—」では非常勤研究員の小坂恵敬氏に、2 回目「当事者の経験に見るイスラームと同性愛—日本人 LGBT + ムスリムの場合—」では同じく非常勤研究員の梅津綾子氏にご登壇いただいた。人類研の所員、研究員の方々には人類学研究所のイベントを、研究を進めていく枠組みとして積極的に利用していただきたい。

人類学博物館と人類学研究所の主催で映画上映会「ダホメ」が実施された。文化財の返還をめぐる内容であり、吉田憲司先生にコメントしていただいたおかげで、理解が深まった。一般の方も多くの方々が参加した。また、公開シンポジウム「食」は世界をつなぎ、分断する——食品のサプライチェーンをめぐる人類学」、講演会・コンサート「世界無形文化遺産 南音と古琴の世界を訪ねる—中和の美を求めて」、公開研究会「なりわいとグローバル経済」の開催に際し、人類学研究所が共催として加わった。

2025 年 5 月には 3 研究所（人類学研究所、南山宗教文化研究所、社会倫理研究所）の合同企画、YAMAZATO60 + 関連イベント、として「南山大学レーモンド建築をめぐるキャンパスツアー」が実施された。講師を務めてくださったのは、人類学研究所の元第二種研究所員の濱田琢司先生である。今後も 3 研究所の共同の企画を立案していきたい。

2026 年 1 月には人類学フェスティバルが開催され、多くの学生、一般の方々が参加した。南山大学のほか、名古屋大学、中京大学からも参加があり、東海地区の人類学研究の恒例行事となりつつある。特に今回は子供の参加が多く、今後の活動の方向を考えるきっかけともなった。

国際化推進事業は 2025 年度から仕組みが変わり、2024 年度までのように研究所を中心とした 3 年間単位での事業が実施されることはなくなった。代わりに、大学院が中心となり、個別の企画を実施する仕組みとなった。そのため、人類学研究所は、年度ごとに個別の企画を積み上げていきたい。

2025 年度の後半に続き、2026 年 4 月から 2 年間渡部が所長を務めることとなった。人類学研究所が日本、特に東海地区の人類学研究の拠点、ハブとして機能することを目指し、今後も少しずつ活動実績を積み重ねていきたい。何か企画のアイデアがある方は気軽ににご相談いただきたい。

エチオピアにおける宗教変容と社会変化

石原美奈子（人類学研究所・第二種研究員）

アフリカ北東部にあるエチオピアは、大学院修士課程1年生で初めて訪れて以来、40年近くにわたり私の好奇心の受け皿となってくれた。ほぼ毎年訪れては、主として宗教に関わる調査を実施してきた。

エチオピアは、4世紀に遡るキリスト教の歴史をもち、それは独特な仕方でも発展してきた。その独自性と異質性は多くのキリスト教徒やユダヤ教徒の欧米人研究者の関心を集めてきた。だが、7世紀以来の歴史をもつイスラームについては、ほとんど研究がなされておらず、私が研究を始めた1990年、イスラーム史学者のトリミングが著した『エチオピアのイスラーム』（1953）が主たる先行研究であった。ムスリム世界のフロンティアで研究を切望していた私の好奇心がうずいた。

修士1年の時、（当時）筑波大学の佐藤俊教授をリーダーとする調査隊に同行させてもらった私は、アディスアベバ大学に新設された人類学専攻の大学院生のズックワラ山への調査旅行に参加した。首都アディスアベバから南に40キロほどのところにあるズックワラ山は山頂にカルデラ湖がある休火山で、湖の北側に教会があり、年に1度の大会に巡礼者が集まるのである。そして夜になると対岸の南側の森の中でいくつかの焚火を囲んで歌や憑依が始まった。この夜のプログラムは驚きの連続であった。キリスト教の祭りのために集まっていた人々の口からムスリム聖者の名前や「神は偉大なり」とアラビア語が聞こえてきたりしたのである。この時の体験がその後の私のエチオピアとの関わりを規定したといっても過言ではない。

その後、半年間ほど、エチオピア南部のネゲレ町に滞在した。当初アディスアベバ大学のキリスト教徒の講師の家族の家に居候させてもらった後、当時町でクルアーン学校を開いていた宗教指導者の家をお願いして居候を始めた。そこで、イスラーム的な生活を経験する傍ら、町の中に建てられた聖者廟の歴史などの聞き取りを行った。

博士課程に入り、私はエチオピア南西部に調査地を移した。南西部の辺縁部には、（アジア・アフリカ語族）オモ系の農牧民や、ナイロ・サハラ語族の牧畜民など、少数民族が多数住んでおり、京都大学の故福井勝義教授はじめイギリス人やドイツ人の研究者が人類学的調査を行っていた。それら少数民族は20世紀初頭にエチオピア帝国に征服される過程で奴隷狩りの対象となり、南西部の交易路が交差するジンマ市はムスリム商人たちが集まる南西部随一の都市であった。ジンマを中心とする地域（ジンマ県）は、ギベ川の源流域のひとつでそこには19世紀に5つの王国が成立し、「ギベ5王国」と呼ばれていた。このギベ5王国のうち、唯一1930年まで残ったジンマ王国については、アメリカ人類学者がその歴史と社会について民族誌を記していた。また1990年には、東のハラール出身の在米オロモの人類学者が、ギベ5王国の歴史について言及した『オロモの歴史』と題する本を刊行していた。私はこの2冊をもってジンマに向かった。

ギベ5王国の中で最も初期にイスラーム化したゴンマ王国は、ゴンマ郡となってその名をのこしていた。イスラームの調査を行うつもりだった私はゴンマ郡の中心地アガロ町に行き、そこを拠点にしながら、王国の歴史やムスリムの墓廟が建てられたところに赴き、歴史を尋ね歩く生活を始めた。その過程で「出会った」のがアルファキー・アフマド・ウマル（1953年没、以下、アフマド・ウマル）である。アフマド・ウマルは、西アフリカのボルノ（現在のナイジェリア東部）出身で、20世紀初めにエチオピア西部にやってきて、イスラーム、とくにティジャーニーヤというスーフィー教団（タリーカ）の教えを広めたことで知られる。アフマド・ウマルは晩年ジンマ県ゲラ郡の森の中で暮らしたので、その子孫や崇敬者が数多くジンマ県に住んでいる。子孫や崇敬者に導かれて、アフマド・ウマルの足跡をたどる旅をはじめ、彼が四半世紀過ごした、エチオピア西部に何度も足を運んだ。1990年代前半であった当時、まだ生前のアフマド・ウマルを知っている人々もあり、涙を流しながら、その人生を語ってくれた。それが私の博論になり、『愛と共生のイスラーム』（2021）となった。

2年半の滞在を終えて1995年3月末に帰国した私は、1998年に、首都にある日本大使館の専門調査員として、またエチオピアに戻った。2年間の任期を終えて、2000年4月に南山大学に奉職した。それ以降、様々なテーマのプロジェクトに参加したり、自分で企画したりしながら、少しずつ焦点をずらしながらエチオピアの宗教変容と社会変化について調査研究を続けた。なかでもやりがいがあったのが、ムスリム女性聖者スティ・ムーミナ（1929年没）の軌跡をたどる調査である。現在も、「不思議な場所」として知られるファラカサ（首都から南東に約120キロ）には、全国から宗教や民族の別を越えてさまざまな「問題」を抱えた人々や霊媒師が集まり、祝福や癒しを得て帰っていく。大学院生の時に（ズックワラで）蒔

いた種をファラカサで収穫したかのような思いでこの調査を行ったのを覚えている。

その後、コロナ禍を挟み、政治情勢の悪化もあって、調査地が比較的平和であった南西部に限定されてくる。それまでジンマ周辺で調査研究を行っていたながら、関係をもったことがないジンマ大学を訪ねると、歴史遺産学部のケテボ准教授を紹介していただき、ケテボ先生が尽力して設立したアーカイブズ・センターで研究を行うことにした。同センターに収集された行政文書を紐解きながら、歴史を探る作業はとても面白かった。

また、それと並行してジンマ市からさらに南西に 300 キロほどの、南西エチオピア諸民族州に住むベンチの人々の調査を 2023 年に始めた。これは、大学院生の中村結友さんがプロテスタント系キリスト教の拡がりについて調査を開始するにあたり同行したことがきっかけとなった。そこで「消えゆく文化」の一端を担う霊媒師の残影を見て、それについて書きたいと思ったからである。

当初イスラーム社会の研究から始めた私のエチオピアでの研究の旅路も、いまやキリスト教や霊媒師にその対象が広がっているが、「宗教変容と社会変化」という括りのなかにおさまっているところをみると、やはり私の関心はそうしたところにあるのだろう。何を「面白い」と感じるかは人それぞれであり、私も自分の感覚を信じながら研究生生活を続けてきた。なので、つぎの風が吹くまで、しばらくは南西エチオピア諸民族州の人々と関わりながら、民族誌を書いていく作業を続けてみたいと思っている。



ティジャーニーヤ導師
アルファキー・アフマド・ウマル



ムスリム女性聖者スティティ・ムーミナ
の子孫のもとに集まる人々

着任のあいさつ

鈴木康二（人類学研究所・第一種研究所員）

2025 年 4 月に南山大学人類学研究所第一種研究所員兼人類学博物館担当学芸員として着任して、1 年が経つ。ようやく少し慣れてきたように思う。これまでの自身の経験と考えてきたことを少し振り返りつつ、これからの私自身が目指すところについて整理しておきたい。

元々は、愛知県安城市の出身で、大学進学とともに関西へ、学生時代は京都で過ごし、滋賀で埋蔵文化財行政に就き、25 年以上携わった。「考古学」について意識するようになったのは、大学 2 年の夏、来年から入るゼミを考えていて、以前受講した「考古学」の授業の内容と講義を担当されていた和田晴吾先生の語り口と経験談に興味をもち、「考古学ゼミ」を専攻しよう、と思ったことがきっかけである。当時は、そもそも歴史は好きではあったが、「考古学」という言葉の意味すらもよく知らなかった。

「考古学」を学び始めた頃は、旧石器～縄文時代の「石器」、特にその「製作技術」と「使用方法」に興味を持った。文化の示準となる定型的な石器だけではなく、それらに伴う、製作技術や使用方法が定まらない「不定型の石器」が特に気になった。一般に、旧石器文化から縄文文化への変化は、定型的な石器群とその組成の変化、加えて土器の登場、気候変動による環境変化、そして生業形態の変化、などから導き出される。一方でそれらの変化の中に埋没し、当時研究の俎上にほとんど載っていないように感じたのが「不定型の石器」だった。旧石器時代的石器群から、縄文時代的石器群へ、文化が大きく変化しているように見える中で、この「不定型の石器」だけは、あまり変化せず続いていくようにみえた。ただ、今になって思えば、あくまで実態としては不定型な石器にも変化はあるし、そんなに単純に物事が整理できる訳ではない、ということにも後になって気づくのではあるが。

「縄文土器」へと興味が広がったのは、就職して 8 年目ぐらいの頃で、当時は縄文土器についての知識はほとんどなかった。きっかけは、神奈川のとある縄文時代前半の発掘調査資料を実見したことだった。縄文時代早期末～前期初頭の 2～3 棟の竪穴建物が同じ場所に続けて構築、切りあって検出され、その床面から 2～3 段階にわたる土器が、明確な切り合い関係を持ちながらみつかった、という資料である。その土器を実見する中で、土器に描かれた文様や、その文様を施すための技術／意識に、明確に一定の方向性をもった変化の様子が垣間見え、改めて「縄文土器」の観察を通じてみえるであろう世界の可能性を実感したのである。その後、縄文時代早期後半～縄文時代中期初頭の「土器」の製作・使用方法、そしてその技術的な伝統とその継承のあり方、に興味・関心が広がっていった。

そんな時にかつて「貝塚」に興味を持っていたことを思い出す。

実は学生時代、考古学に興味を持ち始めた頃、今思えばとても恵まれていたのだが、度々大学や国立博物館が実施する縄文「貝塚」の発掘調査に参加する機会があった。また、滋賀に就職した頃も、世代の近い同僚や先輩が、びわ湖の縄文貝塚の整理調査に取り組んでいて、その貝塚から出土した「石器」の分析を手伝ったこともある。しかしながら、自身の研究テーマとして「貝塚」を明確に意識するようになったのは、縄文土器に興味をもち、その背景を含めて色々な可能性を考えるようになった、この頃からだと思う。

日本考古学における「貝塚」についての学史は、実は枚挙に暇がない。そんな中で、当時筆者が最も気になったのは「山内清男」という縄文土器研究の大家の「選択」だった。昭和時代前半当時の日本考古学界では、明治期以来の日本人の起源を巡る論争に終止符を打つべく、また一方で宅地開発や肥料としての貝灰の採掘などによって破壊されつつあった「貝塚」を守るべく、多くの考古学徒が日本各地でその調査に注力していた。例えば東海地域でも、吉胡貝塚をはじめ、多くの貝塚から多数の人骨や土器などが発掘され、その結果、考古学的にも人類学的にも顕著な成果を挙げたことは広く知られている。

その状況のなか、山内は、縄文土器研究、特にその「編年」体系を構築するのに、「貝塚」出土資料にこだわり続けた。確かに、他の一般的な集落遺跡に比べると、仮に小規模な発掘であったとしても「層位的に保証された一括資料」が得られる確率が高いし、編年体系を構築する上で「時間軸」を確定させる必要があったことを踏まえても、「貝塚」にこだわって調査し続けたことは理解できる。ただ、それでも集落遺跡の遺構（例えば竪穴建物跡や土壌など）から出土する土器も、「一

括性」を担保できる出土状況さえ確認できれば、一定の前提条件を付加することにはなるものの、貝塚出土資料と同様に扱うことも不可能ではなかろう。山内のこだわりは、「限りなく前提条件を揃え」た上での、ある種の「科学的な枠組み」に近い編年体系を構築することであり、実際にそれを具現化していった山内の縄文土器研究は、今なお慧眼に値する。

さて、「貝塚」そのものの研究や山内清男、あるいは学史的にみた昭和の「貝塚」研究、さらには考古学史とそこに登場する、例えば中谷治宇次郎、清野謙次、酒詰仲男、小江慶雄、藤岡謙二郎といった先学達への興味とともに、改めて考古事象そのものやその時代・社会背景を包括的に考える必要性を実感するようになるのは、この頃からだったように思う。

ともあれこうして「石器」「縄文土器」「貝塚」と、少しずつ研究・興味の対象を拡げながら、「考古学」研究に取り組んできた。その一方で、埋蔵文化財センターの教育普及担当職員、県立博物館の学芸員として勤務した頃から、文化財と「教育」との関わりの大切さとその奥深さを、様々な場面で実感するようになっていく。また、大学の非常勤講師として「博物館教育」を担当するようになり、改めて博物館における教育についても考え始めていた。ユニバーサル・ミュージアム研究会に出会ったのもこの頃で、博物館教育の中でも、「実物資料に『さわる』こと」、「レプリカ」そして「ワークショップ」へと興味は広がっていった。そして当時「博物館教育」を受講していた学生に協力してもらい、休日を利用して、未就学児向けの歴史系ワークショップを企画・運営するようになり、「NPO 法人ちゃいれじ」の設立・活動開始へとつながっていく。

またこの頃から、自身の中に、「考古学」「博物館教育」とは別に、もうひとつの研究軸として「こども」が対象になり始めていた。ワークショップの実践を通して、現代のこども達と向き合い、そのこども達の様子から気づいたことを研究会等で発表する一方で、「考古学」においても、例えば「縄文土器作り」の伝統・技術は「こども」達が日々の遊びの中で受け継いでいくのではないかと考えるようになっていった。またその頃、とある大学の先生との関わりがきっかけで、「本格的にこども達と関わり、これまで培ってきた文化財・考古学の知識を活用しつつ、もっと丁寧に『こども』達と向き合える教育の場」を求めている自分の気持ちを自覚するようになる。そこで、文化財の仕事に従事する傍ら、「保育士」試験を受験、資格取得をきっかけに文化財の仕事から離れ、保育の世界に飛び込むことになる。

保育園への就活では、「五十代・初心者・男性」という条件もあって、当初は就職先が思うように見つからなかった。そんな中採用してくれた園があり、真っ先に園長先生にその理由をお伺いした。曰く「これまでの色々な経験を活かして、こども達とじっくり向き合って欲しいと思ったから。」とのこと。ただただ感謝である。そんなご縁にも恵まれて、無事保育士になれたのである。そしてその後1年半の保育士生活を経て、2025年4月南山大学に赴任した。

2026年5月現在、普段は人類学博物館に常駐して、来館して下さる方々とお話ししたり、資料管理の仕事をしたりしつつ、学芸員養成課程の中では博物館実習の担当教員として、また、2026年度からは、博物館資料論も担当する予定で、学生と一緒に博物館と博物館学芸員について日々学びを深めている。また人間の尊厳科目も、「こども」と「博物館」をテーマに、4月から新たに担当させていただいている。180名という大人数での授業はこれまでに経験がなく、学生一人一人の状況を把握するのは物理的に難しいことを改めて実感する一方で、授業毎に提出してもらうリアクションペーパーからは、本音・本心をのぞかせる学生も少なからずいることを実感している。彼・彼女らの紡ぐ言葉からは、学芸員養成課程を受講していない今の大学生の博物館事情や、彼・彼女らを取り巻く様々な社会状況に対するそれぞれの思いについても、おぼろげながら感じる事ができ、本当に貴重な私自身の学びの機会ともなっている。

今改めて、自身が目指したいところとしては、

- ① 今昔の「こども」と真摯に向き合いたい。それは、考古学にみる「こどもの存在」であり、現代を生きる「こどもの学びの姿」であり、それらをより実態として受け止めたい。
- ② 「博物館」という場所、そこに保管・管理される「資料」とその背景、そしてそれらの役割と具体的な活用方法を、より幅広く、より丁寧に、老若男女、そしてもちろん「こども」達にも届けられるように、一つずつ形にしていきたい。
- ③ その上で、これからの「こどもの健やかな未来」を実現するために、自身にできることは何か？を問い、考え続け、それを形にしていきたい。

という、大きくはこの3つの思いに集約できよう。焦らずじっくり丁寧に形にしていきたい。

そう言えば、実は先の園長先生の言葉には続きがある。「ぜひ、こども達と縄文土器作り、やりましょう！」と言ってくださっていた。4つ目の思いとして、その園でもいつか必ず実現したい。

編集上の変革と今後の展望：Asian Ethnology における Scholastica 導入

ドーマン・ベンジャミン（人類学研究所・第一種研究所員）

『Asian Ethnology』は、その前身である『Folklore Studies』が1942年に創刊されて以来、アジアの人々、文化、社会に関する質の高い研究を発信するという使命を維持しながら、学術出版を取り巻く環境の変化に応じて発展を続けてきた。創刊85周年を迎える本誌にとって、2025年のScholastica導入は近年における重要な取り組みの一つである。

Scholasticaへの移行は、近年における本誌の編集基盤の整備の中でも特に大きな変化の一つである。従来、投稿管理、査読、出版業務、ウェブサイト運営は、電子メールや個別の管理システム、複数のオンライン環境を組み合わせで行われていた。これらの仕組みは長年にわたり本誌の運営を支えてきたが、学術出版を取り巻く環境が複雑化するなかで、より統合的な運営体制が求められるようになった。

Scholasticaは、投稿管理、査読管理、出版業務、ウェブサイト運営を一体的に行うことのできるプラットフォームである。これらの機能を一つの環境に集約することにより、本誌は従来の編集方針や査読体制を維持しながら、運営面での効率化を図ることができるようになった。

導入による最も大きな成果の一つは、査読プロセスの管理体制の向上である。編集者は投稿原稿の状況をより容易に把握できるようになり、査読の進行状況の確認や著者・査読者との連絡も一元的に行えるようになった。これにより、編集業務の透明性が高まるとともに、事務的な負担の軽減にもつながっている。

また、本誌の国際的な編集体制における連携も強化された。『Asian Ethnology』は、南山大学を拠点とする編集部に加え、海外在住の編集者や編集委員、査読者との協力によって運営されている。共通のプラットフォームを利用することで、地域や組織の枠を越えた情報共有や編集業務の調整がより円滑に行えるようになった。

さらに、今回の移行には本誌ウェブサイトおよびオンライン出版基盤の刷新も含まれている。投稿管理から公開までを一体的に管理できる環境が整備されたことで、デジタル運営基盤の安定性が向上し、複数のシステムを個別に維持する負担も軽減された。これにより、編集部はより一層、本誌の学術的使命に集中できる環境を整えることができた。

もっとも、こうした技術的な変化によって、人の役割が小さくなるわけではない。査読者の選定、著者とのやり取り、掲載可否の判断をはじめとする編集上の判断は、引き続き編集者の重要な責務である。また、学術誌の運営を支えるさまざまな事務的業務も依然として欠かせない。特に、南山大学の編集補佐員をはじめとする関係者の貢献は、本誌の円滑な運営において重要な役割を果たしている。

Scholasticaの導入は、本誌が長年維持してきたオープンアクセス出版の理念とも整合している。国際的に広く利用されている安定した出版基盤を活用することで、研究成果をより多くの読者へ届けるための環境が強化された。

このように、Scholasticaの導入は単なるシステム変更にとどまるものではない。それは、『Asian Ethnology』が今後も持続可能で、国際的な学術交流の場として発展を続けていくための基盤整備の一環であり、アジア研究の成果を広く発信していくための新たな一歩となっている。

沼澤喜市資料整理プロジェクト報告（2025 年度）

竹内愛（人類学研究所・プロジェクト研究員）

2025 年 3 月に沼澤喜市資料整理担当業務を前任のプロジェクト研究員の加藤英明氏から引き継ぎ、1 年 3 ヶ月ほどが経過した。2025 年度は、主に、3 つの作業が中心となっている。1 つ目が沼澤資料のスキャン作業、2 つ目が沼澤日誌の文字起こし作業、3 つ目が沼澤資料の資料劣化を防ぐため中性紙封筒への入れ替え作業である。本報告書では、3 点の作業の進捗状況について報告し、最後に、沼澤資料の中で、報告者（竹内）が気になった資料を紹介する。

① 沼澤資料のスキャン作業について

スキャン作業は、宮脇千絵第一種研究所員のもと、昨年に引き続いて人間文化研究科の大学院生によって進められている。2025 年度は途中で 1 名増員し、計 4 名体制で実施した。2025 年 4 月、封筒番号 224 からスタートし、2026 年 3 月末時点では、封筒番号 346 まで完了している（封筒数 497）。

アルバイト生らは、自身のスキャン作業の進捗状況を共有の作業記録ノートに手書きで書き込んでおり、スキャン作業の過程で共有しておきたいことや質問についても、随時、その作業記録ノートにメモ書きすることになっている（写真 1）。プロジェクト研究員の竹内は、そのメモ書きの内容を確認の上、随時、対応してきた。具体的な確認内容としては、目録にある資料タイトルと紙面上のタイトルが異なっている、目録にタイトルが欠落している、資料タイトルが誤っているなどが挙げられる。これらの場合は、封筒に入っている現物の紙面のタイトルの方を優先し、目録を加筆・修正する対応を行った。その他、封筒の番号が異なるものの、中身の刊行物が全く同一である場合は、一方の刊行物のスキャン作業を省略し、後方の番号を欠番とする対応をした。

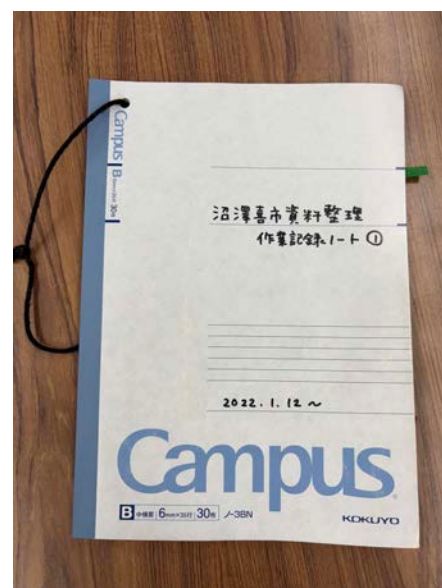


写真 1 作業記録ノート

② ニューギニア日誌の文字起こし作業について

沼澤氏のニューギニア日誌 9 冊分をパソコンに書き起こす作業は、2025 年 12 月～2026 年 3 月の間、社会人の方を 1 名アルバイトとして雇って進められた。4 ヶ月間で、日誌 9 冊のうち、5 冊の文字起こしが完了した。2026 年度も、文字起こし作業は継続していく予定である。

③ 沼澤資料の中性紙封筒への入れ替え作業について

続いて、沼澤資料の中性紙封筒への入れ替え作業について報告する。2025 年 10 月 12 日に、2025 年度人類研第 1 回研究会が実施された。本研究会において、湯屋秀捷氏（宮古島市総合博物館学芸員）が、「沼澤資料整理作業をふりかえる一冊目録作成と作業方針の意図」と題した発表をし、湯屋氏が沼澤資料整理に携わっていた南山大学大学院在籍中の沼澤資料整理は当時の院生たちによってどのように行われ、保存してきたのかを知る貴重な機会となった。さらに、湯屋氏から、沼澤資料の保存方法について、資料劣化を防ぐために、現状の茶封筒での保存ではなく、科学的に安定した中性紙（アーカイバル）の封筒を使用の方が良いと貴重なご忠言をいただいた。これを受けて、人類研事務室では中性紙の封筒を発注し、2026 年 3 月から、宮脇千絵第一種研究所員とプロジェクト研究員の竹内で、茶封筒に保存されている沼澤資料を中性紙の封筒に入れ替える作業を開始した。中身を入れ替える際に、これまで茶封筒に記載してあった封筒番号とタイトルの文字を中性紙の封筒にそのまま書き写している。2026 年 3 月時点で、封筒の入れ替え作業は、117 番まで進んでいる。次年度も、作業を継続していく予定である。

最後に、沼澤資料の中から、報告者（竹内）が気になった原稿を紹介したい。封筒番号 94（箱番号 7）には、沼澤氏がド

イツ留学中の昭和9年に、ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館で、世界中の多様な民族文化を見学した時に受けた深い印象と感動について記した原稿が入っている（写真2、写真3）。以下に引用する。

当時カントの観念論的哲学を勉強し、自我の問題でゆきづまりを感じていた私は自我というものを「人間」としての立場から考えねばならないのではないかと考えはじめていた。そういう私にとってその日初めてラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館をみて受けた印象は深かった。（中略）それまで全く知らなかった人間の未知の世界に対して私の目が開かれた。「人間」というものを考える上に、全く新しい材料が加わってきた。この点に関して私にその頃大きい感動と印象を与えたのがこのラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館であった。（中略）「人間」というものを前よりもはるかに広い視野の上から考えた。

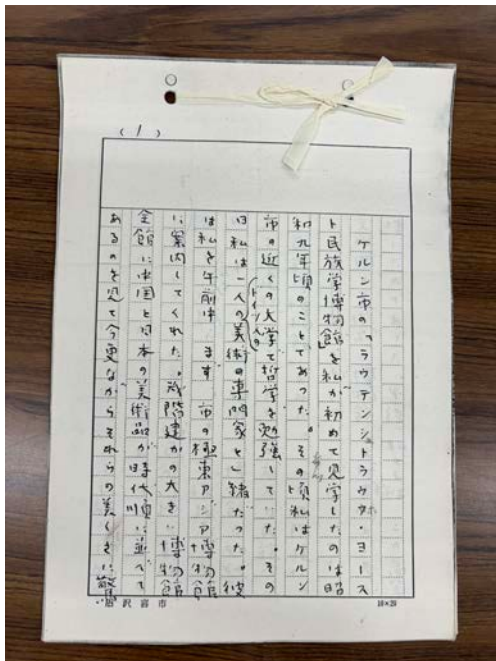


写真2 沼澤資料 (1 頁目)

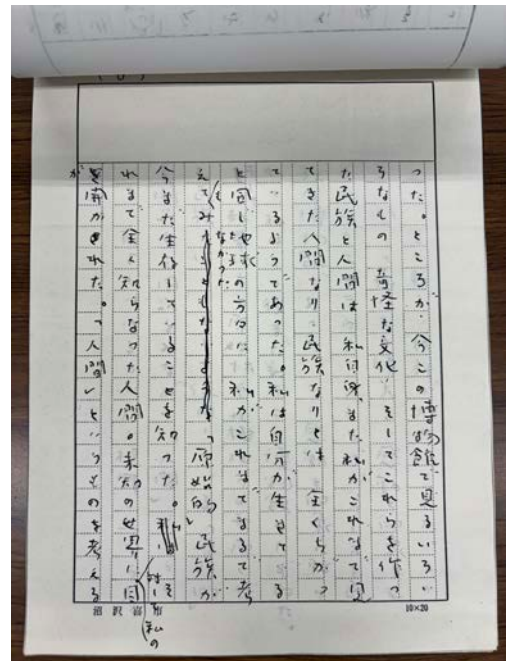


写真3 沼澤資料 (4 頁目)

沼澤氏は、「哲学から人類学へ」の中で、旧制中学4年生の頃から一貫して、「自我」とは何かという問いは自分にとって何よりも第一に解き明かしたい問題であったと述べている。「自我」を探究するために、大学では哲学を研究し、さらに、カトリックを学び、神は自らの像（すがた）にかたどって人間を造り給うたという旧約聖書の人間観に触れたことで「自我」を間接的に把握し、洗礼を受けたのだという。それからドイツに留学し、神父となり、その後、W. シュミットのもとで文化人類学を学んだ。沼澤氏は、人類学を学ぶことによって、「『自我』を哲学によって内面からのみ把握しようとして行き詰まっていたが、間接的に人間としての『自我』が実証科学的に客観的立場から見ていかれるべきであると気づいた」（沼澤1967:222-223）と述べている。今回紹介した、沼澤資料の中のラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館で多様な「人間」の存在に感動したエピソードは、その後の沼澤氏の研究に決定的な影響を与えた出来事だと考えられる。本資料は、同氏の「自我」への問いが哲学的考察から人類学的考察へと移行する契機となった、極めて貴重な経験を伝えるものである。

参考文献

沼澤喜市

1967「哲学から人類学へ」『学生におくる－現代の知性から－』会田雄次（編）、pp.220-223、旺文社。

沼澤喜市資料の紹介：シラバスから見る沼澤とシュミットの文化圏説との関係

小玉翔太 (南山大学大学院 人間文化研究科人類学専攻 博士前期課程)

筆者は、2025年度から現在(2026年度6月)までの1年あまり、沼澤喜市資料整理プロジェクト(以下、本プロジェクト)に携わっている。本稿では、筆者が実際に手に取りスキャンした資料の中から、資料番号351の沼澤のシラバスと思われるものを紹介する。

資料番号351は、1つの書類整理箱に収められていた資料群である。書類整理箱は、茶色の厚紙製で大きさは長さ29cm 幅21cm 高さ4.5cmほどで、身とふたが一体となっており、ふたの側面に「講義」と記されたシールが貼られている。その中に、4通の手紙と、B4からメモ用紙サイズまで様々な大きさの100枚以上の文書が収められていた。

文書は、シラバスのような資料2枚、講義の概略1枚とその概略に沿って書かれた原稿24枚、そして一方は1から6まで、もう一方は1から100まで(24のみ不明)のページ番号が振られた2種類の原稿100枚あまり、そして数字とアルファベットが書かれたメモ1枚からなる。これらの資料には執筆年度は書かれていなかった。

本稿ではこのうち、シラバスのような資料1枚(以下、本資料)を取り上げる(図1)。本資料には、「民族学演習」とあるほか、対象学年や「単位」、「題目」、「概要」、「使用教科書」が書かれており、右上には「2月4日教ム課提出」とある。「題目」は、「外書講読と研究指導」であり、「使用教科書」はW・シュミット著『文化歴史民族学の方法の手引き(Handbuch der Methode der kulturhistorischen Ethnologie)』(1937)である。

本資料の使用教科書について筆者が興味深いと感じた点を紹介する。沼澤は、9年以上にわたりスイス・フリブールにあったアントロポス研究所(Anthropos Institute)で、シュミットの指導のもと研究に従事していた。シュミットは文化圏説を発展させ文化史的民族学の方法を完成し、ウィーン学派の基礎を築いたことで有名である。しかし、シュミットの方法論は、近年あまり顧みられなくなっている。筆者は、当時沼澤が師であるシュミットの方法論を日本で普及させようとしていたのではないかと考えたが、実はそうではなかったようだ。

本資料の講義は、過去の南山大学の履修要項から1955年または56年に開講したと思われる(註1)。第二次世界大戦後にシュミットがウィーン大学に復帰して以降、シュミットの文化圏説には疑問点が出てきた(中村1997:33)。また1954年の石川英吉の論説では、日本において文化圏説がすでに落ち目にあった様子も伺える(石川1954:77)。さらに沼澤自身、1954年のシュミットの追悼文の中で、シュミットを人類学者としてそして人格者として賞賛するかたわら、シュミットの文化圏説があまりに図式的であったという問題を指摘している(沼澤1954:14-15)。

では、なぜ沼澤はこの著書を用いたのだろうか。沼澤は追悼文のなかで、文化圏説の問題を指摘する一方で、自らの研究の結果が、シュミットの図式と多くの点で一致していることに気づき、「驚異の念を禁じ得ない」(沼澤1954:15)と語っている。沼澤は、シュミットの文化圏説は本質的な点でその妥当性を維持し続けると考えていた。沼澤は自らの研究において、

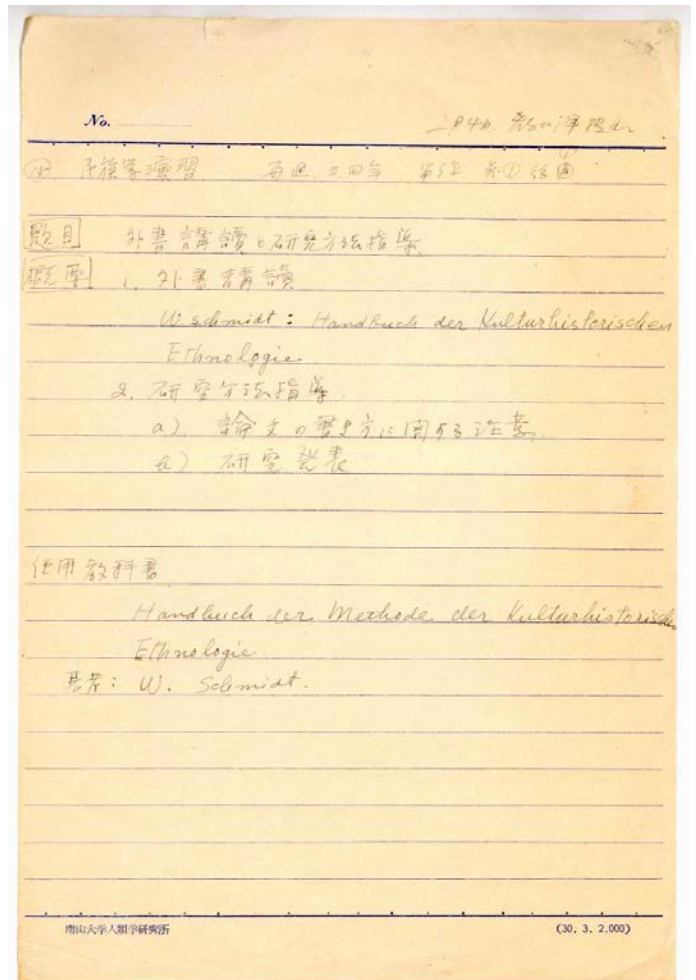


図1:「民族学演習」の資料(資料番号351)

シュミットが文化圏説で用いた専門用語を使用しているが、それは文化圏説に基づいて研究を行ったからではなく、自らの研究の結果が文化圏説の図式によって最も把握できると考えていたからである（山田 1980: 85）。沼澤は、師であるシュミットの方法論をただ日本で広めるためにこの著書を選んだのではないようである。シュミットの著書を通して、自らの学習と研究の経験を学生たちに伝えようとしていたのかもしれない。

本稿は、本プロジェクトにおいて実際に筆者が手に取り興味を惹かれた資料を紹介するものである。しかし、本資料をきっかけに、多くの文献にあたり、背景の情報や別の資料と結びつけることで、沼澤の講義や研究者としてのあり方を推論するに至った。ここに沼澤喜市資料の活用を目指す本プロジェクトの意義を再確認することができたのではないかと感じている。

註)

1) 1954 年から 1975 年までの履修要項を参照した。沼澤が「民族学演習」を担当していたのは、1954 年から 1957 年であり、1955 年から 1957 年の要項の記述と本資料の題目が一致した。そして、資料 351 には本資料と全く同じ形式で書かれた「宗教民族学」のシラバスがあり、1955 年と 1956 年に沼澤がこの講義を担当している。また 1958 年の履修要項からは、沼澤が「宗教民族学演習」でシュミットの同著書を用いていたことも確認した。

参考文献

石川栄吉

1954 「＜論説＞文化圏説の初期：オセアニア研究における」『史林』37(1): 77-90。

中村たかを

1997 『文化人類学史序説』源流社。

沼澤喜市

1954 「In Memoriam — P. Wilhelm Schmidt SVD」『アカデミア』(7) : 1-22。

山田隆治

1980 「沼澤喜市先生を偲ぶ」『民族学研究』45(1): 84-86。

Wilhelm Schmidt

1937 *Handbuch der Methode der kulturhistorischen Ethnologie*. Münster: Aschendorff

沼澤喜市資料の紹介：考古記事への関心

伊沢吉龍（南山大学大学院 人間文化研究科人類学専攻 博士前期課程）

筆者は2025年11月より沼澤喜市資料整理プロジェクトに携わり、2026年6月現在までに箱番号28、31の資料スキャンを完了し、箱番号31の資料に着手している。これらの資料は研究資料、原稿、手紙、新聞、刊行物、写真、紙帯、神言会に分類され、分類項目が未だ定まっていなかったものには医療診断書やカレンダー、色紙などがある。原稿には1965年に放送されたNHK番組「夜のアルバム」の原稿や台本を含むほか、沼澤氏の講義や講演、学長挨拶、寄稿の原稿や随筆が入っており、その多くは原稿用紙の穴を通して束ねられ、ページ番号を割り振られている。一部の原稿用紙には裏面にも文章が書かれており、原稿の束を裏からめくって読むこともしていたと想定される。新聞は1964年に南山大学東ニューギニア調査団長になった際の記事や1966年のピグミー族調査時の記事、1970年代当時の沼澤氏が関心を持ったと思われる記事などが含まれている。新聞にはオレンジ色の書き込みや線が引かれており、当時の沼澤氏がこういった文章の内容を気にしていたのかが窺える。本稿ではこれらの資料の中で考古に関する記事をいくつか取り上げる。

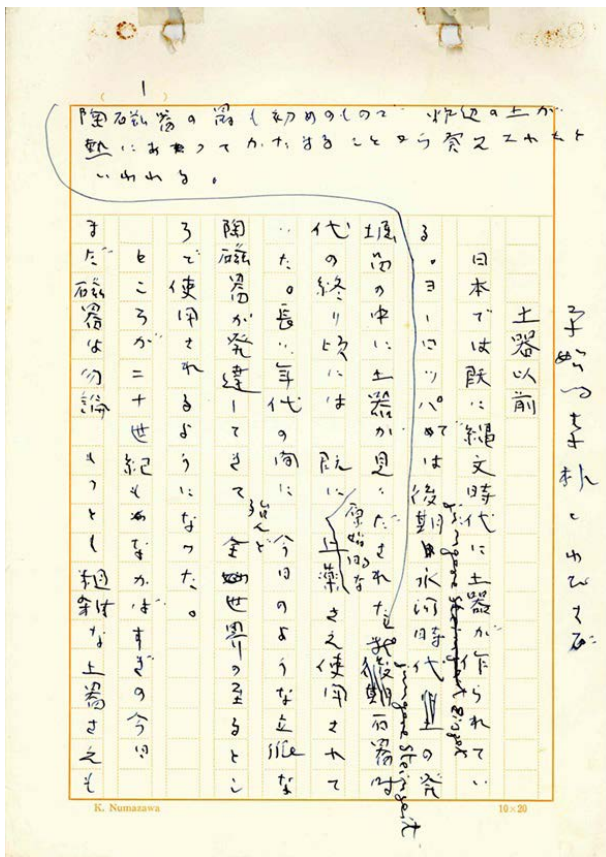
資料番号356の一つで1972年9月5日の朝日新聞夕刊があり、「出雲原人」の骨!というタイトルの記事にいくらか線が引かれている。記事の内容は前期旧石器が多数出土している島根県八束郡玉湯町（現松江市）の玉作遺跡で人骨が見つかり、北京原人と同時期のものだとするものである。「出雲原人」という言葉は聞いたことがなく、こういった検証が行われたかは不明であるが、現状日本におけるこういった前期旧石器や更新世人骨について広く受け入れられていない[春成2001]。一方で当時はそういった批判が少ない時代でもある。沼澤氏は「北京原人と同時代～」、「日本最古とされている明石原人」といった文章の下に線を引き、当時何かしらの関心があったと思われる。

同資料番号の1972年9月17日の朝日新聞の記事は「タイに最古の青銅器文明? 6, 7千年前の器か」であり、タイのバンチェンで6, 7千年前の土器とともに銅や青銅器が見つかったという内容である。1970年代ではバンチェン遺跡の青銅器文化は中国、インドに先行するという学説が生じ、この記事はまさにその時期のものである。このバンチェン遺跡の土器が、2013年に南山大学人類学博物館にも寄贈されており[西江・黒澤2014]、当時沼澤氏が気になった記事の遺跡のものが南山大学内で見ることができるようになったのは何かしらの縁を感じる。

資料番号376の1973年11月9日の朝日新聞夕刊では縄文、弥生についての記事が書かれている。縄文に関する記事は東京都杉並区下高井戸塚山遺跡が縄文中期の環状集落であったと発掘から判明する記事である[杉並区教育委員会1974]。発掘団長であり、当時の慶応大学教授でもあった江坂輝弥がこの記事で居住者の移住の説明にニューギニア島の高地民とソロモン群島の山地民の例に出している。この点が実際にニューギニア高地で調査を行った沼澤氏の目を引いたのであろう。弥生に関する記事では「弥生文化は朝鮮半島から証拠の土器が見つかる」というタイトルで、当時の杉原莊介明治大学教授が夜臼B式土器と関連するものを韓国での資料調査で見つけ、弥生文化の源流が韓国にある可能性について述べたものである。資料番号354に随筆と書かれた袋の中に多くの草稿が入っており、そのうちの一つに「土器以前」というタイトルでニュー



出雲原人写真（資料番号356）



土器以前（資料番号 354）

ギニアの人々の土器を用いない生活を描写している。その前座の話で日本では縄文より土器が使われる話を入れており、沼澤氏が日本の土器について意識していたことはあることを示す。

以上以外の考古に関する記事もあり、沼澤氏が定年で南山大学教授を辞任する前後の時期のものにあたる。沼澤氏はこれらの記事を見てどういった思いを持ったのか、あるいはどういった思いからこれらの記事を見て残そうと思ったのか、沼澤氏への理解につながるものを今後引き続き見ていきたい。

参考文献

杉並区教育委員会

1974『下高井戸塚山遺跡 発掘報告書』。

西江清高・黒澤浩

2014「新たに寄贈されたバンチェン時—山口由子コレクション—」『南山大学人類学博物館紀要』（32）:35-49。

春成秀爾（編）

2001『検証 日本の前期旧石器』学生社。

第1回公開シンポジウム

「中国・台湾における装いとエスニシティ」



日時：2026 年 2 月 20 日（金）14:00 ～ 17:30

会場：南山宗教文化研究所・
人類学研究所 1 階会議室・
オンライン（Zoom）

主催：南山大学人類学研究所

プログラム：

- ・「趣旨説明」宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究員）
- ・「図案から創作物へー 1949 年から 1980 年までの中国におけるミャオ族の民族衣装に関する書籍と展覧会の変遷ー」佐藤若菜（京都女子大学・教授）
- ・「現代中国ファッションにおける「民族的要素」の創作と応用ー伝統服／民族服にみる記号的意義ー」謝黎（聖心女子大学）＊オンライン参加
- ・「民族衣装「のようなもの」ー台湾のエスニック市場における類似品と仲介者の再考ー」田本はる

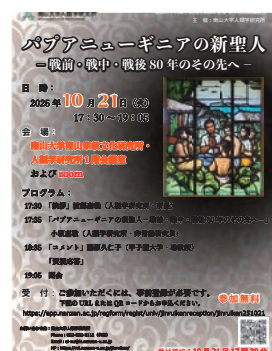
菜（成城大学・専任講師）＊オンライン参加

- ・「古着からみやげものへー モンの手仕事と民族性ー」宮脇千絵
- ・「コメント」中谷文美（関西学院大学・教授）
- ・「コメント」周星（神奈川大学・教授）
- ・総合討論



第1回公開講演会

「パプアニューギニアの新聖人ー戦前・戦中・戦後 80 年のその先へー」



日時：2025 年 10 月 21 日（火）17:30 ～ 19:05

会場：南山宗教文化研究所・
人類学研究所 1 階会議室・
オンライン（Zoom）

主催：南山大学人類学研究所

プログラム：

- ・「挨拶」渡部森哉（人類学研究所・所長）
- ・「パプアニューギニアの新聖人ー戦前・戦中・戦後 80 年のその先へー」小坂恵敬（人類学研究所・非常勤研究員）
- ・「コメント」藤原久仁子（甲子園大学・准教授）
- ・質疑応答



活動報告・公開講演会・南山大学 3 研究所合同企画

第 2 回公開講演会

「当事者の経験に見るイスラームと同性愛—日本人 LGBT +ムスリムの場合—」



日時：2026 年 3 月 5 日（木）17:30～19:05

会場：南山宗教文化研究所・
人類学研究所 1 階会議室・
オンライン（Zoom）

主催：南山大学人類学研究所

プログラム：

- ・「挨拶」 渡部森哉（人類学研究所・所長）
- ・「当事者の経験に見るイスラームと同性愛—日本人 LGBT +ムスリムの場合—」 梅津綾子（名古屋大学大学院研究員（学振 RPD）・人類学研究所非常勤研究員）
- ・「コメント」 石原美奈子（人類学研究所・第二種研究所員）
- ・質疑応答



南山大学 3 研究所合同企画 (YAMAZATO60 + 関連イベント)

「南山大学レーモンド建築をめぐるキャンパスツアー」



日時：【1回目】2025 年 5 月 16 日（金）

15:30～16:30

【2回目】2025 年 5 月 17 日（土）

13:00～14:00

主催：南山大学人類学研究所

講師：濱田琢司（関西学院大学文学部・教授）

司会：宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究所員）



第 1 回映画上映会
「ダホメ」



日時：2025 年 12 月 13 日（土）14:00 ～ 16:30
会場：南山大学 G 棟・G 27 教室
主催：南山大学人類学博物館
南山大学人類学研究所

- プログラム：
- ・「イントロダクション」 高柳ふみ（人類学研究所・第一種研究員）
 - ・映画上映
 - ・「コメント」 吉田憲司（国立民族学博物館・名誉教授）
 - ・質疑応答



台湾・小川資料の寄贈手続きの報告（続き）
渡部森哉（人類学研究所・所長）

活動余話

『人類学研究所通信』第 25 号の中で紹介されている通り、小川資料の寄贈手続きが進められた。

2024 年度中にデジタル化作業が終了し、2025 年度に図書館からの除籍作業を進めた。2025 年 12 月 23 日に Paul Li 李壬癸先生にメールを送り、今後の手続きについて相談した。Li 先生が Center for Chinese Studies at the National Central Library (Taiwan) の Deputy Director である Wen-De Huang 先生に繋ぎ、その後のやりとりは渡部と Wen-De Huang 先生との間で行った。

南山大学と先方との間で MOU を取り交わした方が良さだろうということになり、原案を作成し、寄贈する小川コレクションの計 168 点の資料のリストを添付した。前例のない手続きであったため、執行部に確認し、文書の内容を南山大学のコンプライアンス室で確認していただくことになった。いくつかの点を修正して、2026 年 3 月に人類学研究所の所長である渡部と台湾の図書館長が署名をして文書が取り交わされた。

2026 年 1 月には全く別件で小川資料の調査に台湾から研究者が来られた。台湾の図書館に所蔵されることで逆にアクセ

スしにくくなることを心配されていたが、やはり日本にあるよりも台湾にあった方が良かったという結果になることを期待したい。





日時：2026 年 1 月 25 日（日）12:30 ～ 16:00
会場：南山大学 R 棟 1 階（ホワイエ、応接室、会議室）R 棟地下 1 階人類学博物館
主催：南山大学人類学研究所
共催：南山大学人文学部人類文化学科

1. 学生によるポスター発表
Presented by
藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ（以上、南山大学人文学部人類文化学科）
岡部真由美ゼミ（中京大学現代社会学部）
東賢太朗ゼミ（名古屋大学文学部）
南山大学大学院人間文化研究科
2. 学生参加企画「フィールドワーク・フォトコンテスト」
Presented by 人類学研究所
3. 体験コーナー「Dress the World：中国とインドの服を着てみよう」
Presented by 人類学研究所
4. ワークショップ「布遊びから知ろう！：インドのブロックプリントの世界」
Presented by 人類学研究所（人類文化学科 OG）
5. 人類学博物館 特別開館
presented by 人類学博物館、一部会場：人類学博物館
・ワークショップ「触察!? — beyond the vision —」
・体験コーナー「Hands-on Music Labo ♪」
・人類学博物館企画展「アジアの「あの坐り方」—新収蔵品展井上耕一コレクション」
プレオープン
6. フィールドワーク実習報告
「長野県大滝村でのアーティストと人類学のコラボレーション」
presented by 名古屋大学文学部東賢太朗ゼミ
7. 体験コーナー「表面に残るあれこれ—昔の人が残した痕跡たち—」
presented by 東海学生考古学研究会

人類学フェスティバル報告

宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究所員）

今年は例年以上に多くの企画に恵まれ、親子連れなど多くの方々に来場いただいた。「学生によるポスター発表」では、本学人文学部人類文化学科の3年生を始め、中京大学、名古屋大学の学生、そして大学院生が日頃のフィールドワークや研究成果をポスター形式で発表した。

今回初の試みであった「フィールドワーク・フォトコンテスト」では、学生がフィールドワークや実習などで撮影した写真を展示した。事前に実施したプレ投票で選ばれた25作品について、当日の参加者48名からの投票により、上位7作品を決定し、授賞式を行った。

そのほかの体験企画やワークショップなども、当初の予想以上に多くの来客があった。体験コーナー「Dress the World」には本学の文化人類学研究会の学生2名やインドから来日されている方、ワークショップ「布遊びから知ろう！」には本学人類文化学科OGのみなさん、体験コーナー「表面に残るあれこれ」には東海学生考古学研究会の学生のみなさんにご協力いただき、会場を盛り上げていただいた。また、今年は人類学博物館が特別開館した効果もあってか、親子連れでの参加が多く、それぞれのコーナーで子どもたちの楽しそうな声が多くあがった。

● 東ゼミ（名古屋大学文学部）

東ゼミとしては王滝村での成果報告を、個人としては卒業研究である在日コリアン3世女性に関する発表を行いました。本フェスで印象的だったのは、私の個人発表を、同じく在日コリアンを研究されてきた方が聞いてくださり、意見交換の機会を得られたことです。そのやりとりの中で、一人では研究し尽くせなかった視点や、今後の課題への示唆を受け取ることができました。この経験を通して、文化人類学は自己や研究室の中で完結するものではなく、他者との関係のなかで問いが研ぎ澄まされていく学問なのだと実感しました。今後は私自身も、他者に新たな示唆を手渡せる存在であるために、この感覚を大切にしていきたいです。

（宮地里歩・4年）

● 岡部ゼミ（中京大学現代社会学部）

今回の文化人類学フェスを通して、新しい視点や考え方を多く学ぶことができました。ポスター発表では、さまざまな意見をいただく中で、自分にはなかった考え方や新たな知識の必要性を実感しました。また、他大学の方々の発表を見て、自身の研究がまだ浅いことにも気づかされました。特に、小原歌舞伎に強く焦点を当ててきた一方で、他の事例と比較することで共通点や相違点を探るなど、より幅広く深い研究ができるのではないかと感じました。多くの刺激を受け、新しい学びを得られた非常に有意義な機会でした。

（西尾淳・3年）

今回はポスター発表はなかったが、フォトコンテストに応募した関係で参加した。フォトコンテストの結果は1、2、4位入賞で、思っていた以上の結果となり嬉しかった。今回は私自身の写真が多く入賞したが、さらに多くの方が応募してくれることを願う。衣装体験やボタンづくりなど、普段触れることのないもの・ことに挑戦することができたり、特にポスター発表では発表者の「好き」を題材にしたものや、疑問に思っていることを解明したいという思いがよく伝わるものが多く、今後の卒論作りに繋がるインスピレーションを多く得ることができた。

（多和田涼太・3年）

● 宮沢ゼミ（南山大学人文学部人類文化学科）

自分の研究テーマについて発表することは緊張しましたが、学生や教授の方々から多くのアドバイスやご意見をいただき、今後の研究に活かすことのできる有意義な時間を過ごすことができました。参加した学生の研究テーマも多岐にわたり、「嗜好品の人類学」や「推しの人類学」といった興味深い発表を聞くことができ、勉強になりました。また、人類学フェスでは発表以外にも多くの催しが開催されており、インドのブロックプリントを用いてオリジナルの巾着を制作したり、人類学博物館で世界各国の楽器に触れたりするなど、楽しみながら学ぶことができました。

（小林夢奈・3年）

● 藤川ゼミ（南山大学人文学部人類文化学科）

私は、これまでに大学内の演習や文献調査を通じて、限定的な環境で完結していた自分の研究が、今回の人類学フェスティバルという場を通じて、初めて生きた『社会』と接点を持ったと強く実感しています。特に、私が現在取り組んでいる『グローバル化時代の聖地高野山』というテーマについて展示を行った際、来場者の方々からいただいた多角的な意見は非常に示唆に富むものでした。研究対象を客観的に分析するだけでなく、それを取り巻く生身の人間の声を直接聞くことで、論文の中だけでは見えてこなかった『聖地の多層性』が立体的に浮かび上がってきました。この経験は、机上の空論に陥らないための重要な指針となりました。今後は、今回いただいた視点を調査項目の設計に反映させ、より多角的で血の通った分析を目指していきたいと考えています。

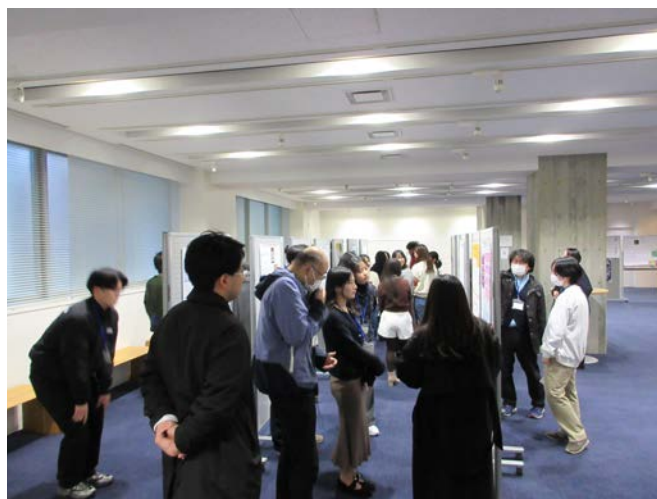
（CHEUNG Yiu Chuen・3年）



学生参加企画
「フィールドワーク・フォトコンテスト」



体験コーナー
「Dress the World：中国とインドの服を着てみよう」



学生によるポスター発表



ワークショップ
「布遊びから知ろう！：インドのブロックプリントの世界」



体験コーナー
「表面に残るあれこれー昔の人が残した痕跡たちー」



名古屋大学によるフィールドワーク実習報告
「長野県大滝村でのアーティストと人類学のコラボレーション」

共催

公開シンポジウム「食」は世界をつなぎ、分断する——食品のサプライチェーンをめぐる人類学」



日時：2025年4月5日（土）13:30～17:10
会場：南山大学 G 棟 G27 教室・オンライン（Zoom）
主催：人間文化研究機構「グローバル地域研究推進事業」神戸拠点：神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート（略称:EES 神戸）「なりわいとグローバル経済」グループ
共催：南山大学人類学研究所

プログラム：

- ・「趣旨説明」 藤川美代子（人類学研究所・第二種研究所員）
- ・「なぜツバメの巣を " 養殖 " するのか？——生産から消費の間のコンテクストを読み解く」 佐久間香子（東北学院大学・准教授）
- ・「Values in the Shell: Translation, Practices, and Indexicality in the Plumping of Oysters in Japan」（使用言語は日本語） 吉田真理子（広島大学・助教）
- ・「この海藻、海女さんが潜って採ってるの？——

日本と台湾の寒天製造を支えるサプライチェーンと知識の接続／断絶 藤川美代子
・「コメント」 富田敬大（神戸大学・特命助教）
・「コメント」 内尾太一（静岡文化芸術大学・准教授）
・総合討論



共催

講演会・コンサート

「世界無形文化遺産 南音と古琴の世界を訪ねる—中和の美を求めて」



日時：2025年6月14日（土）15:00～16:30
会場：南山大学 R 棟 1 階 フラッテンホール
主催：南山大学外国語学部アジア学科
共催：南山大学人類学研究所

プログラム：

- ・開会挨拶 稲垣和也（南山大学・教授）
- ・講演・演奏（通訳あり）
蔡雅艺、陳思来、王維
- ・質疑応答
- ・終演

司会 張玉玲（人類学研究所・第二種研究所員）

演奏曲：

- 広陵散（古琴）
- 陽関三疊（古琴と簫）
- 梅花操（南音）
- 望明月（南音）
- 醉落花（打楽器と琵琶）



活動報告・共同研究

人類学研究所共同研究（2025～2027年度）

「アーカイブズを通じた人類学史研究」

〔代表〕宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究員）

2025年度

▶第1回研究会

日時：2025年10月12日（日）14:00～17:00

場所：南山宗教文化研究所・人類学研究所1階会議室・オンライン (Zoom)

発表：宮脇千絵（人類学研究所）「趣旨説明」

湯屋秀捷（宮古島市総合博物館）「沼澤資料整理作業をふりかえる一目録作成と作業方針の意図」

加藤英明（人類学研究所／機械振興協会経済研究所）「沼澤喜市資料整理報告と今後の展望」

総合討論：全員

▶第2回研究会

日時：2026年2月28日（土）14:00～17:00

場所：南山宗教文化研究所・人類学研究所2階会議室・オンライン (Zoom)

発表：鈴木康二（人類学研究所）「パプアニューギニアで確認された「絵画」から考える一東ニューギニア学術調査団と沼澤喜市調査資料をもとに」

石原美奈子（人類学研究所）「行政文書の歴史人類学的考察に向けてージンマ大学アーカイブズ・センター所蔵の資料から」

総合討論：全員

3 研究所合同企画の実施

宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究員）

活動余話

2025年5月16、17日に南山大学宗教文化研究所（宗文研）、社会倫理研究所（社倫研）と3研究所の合同企画として「人と自然のふさわしい装い（尊厳）を求めてー南山レーモンド建築の過去・現在・未来」が開催された。折しも南山大学は2024年から山里キャンパス60周年事業として「YAMAZATO」プロジェクトを展開中で、本企画も「YAMAZATO + 関連イベント」として位置づけられた。

当時、宗文研所長であった山田望先生のご提案で計画が始まり、宗文研からエンリコ・フォンガロ先生、社倫研から森山花鈴先生、人類研から私の4人に、当時の学事第二課から横田美也子さんが加わり準備にあたった。メールを遡ると2024年10月から7ヶ月にわたり隔週で打ち合わせが開催されていた。3研究所合同でイベントをするのは初めてのことであった。

大学のレーモンド建築に焦点を当てることになり、それぞれの研究所が企画を考えた。ホームページ作成やポスターのデザインおよび発注、国内外から招聘する先生の出張手続き、アルバイトや弁当の手配、会場の設営準備などに関してそれぞれの研究所の経験知をもちよりながら進めていった。人類研では「南山大学レーモンド建築をめぐるキャンパスツアー」

（p.14 参照）を行うこととした。2日間という限られた時間で、講演会「南山大学におけるアントニアン・レーモンド」、「ビデオで観るレーモンド建築」、ワークショップ「The role of nature in architecture in the Anthropocene」、ワークショップ「現代日本の建築デザイン実践における自然を考える」（以上、宗文研企画）、「建築と空間に関する哲学カフェ〜その神聖性と美的・歴史的価値をめぐって」（社倫研企画）という多彩な企画が実施された。

天候にも恵まれ、学生のみならず一般からの参加者も多く、それぞれの観点からレーモンド建築について改めて考えることができた2日間であった。



第一種研究所員

DORMAN, Benjamin

寄稿

Dorman, Benjamin, and Frank J. Korom. Editors' Note, *Asian Ethnology* 84 (1): 4-5.

宮脇千絵

論文

「特集「中国・台湾における装いの境界領域」によせて」『年報人類学研究』(16):72-80。

「古着からみやげものへーモンの手仕事と民族性」『年報人類学研究』(16):126-142。

寄稿

「活動余話 小川尚義資料のデジタル化作業について」『人類学研究所通信』(25):15。

「活動余話 クネヒト・ペトロ氏の蔵書整理について」『人類学研究所通信』(25):26。

日本文化人類学会研究大会実行委員会・東知史・宮脇千絵・辻本侑生・安ヶ平雄太・佐々木耕一・比嘉夏子「第59回研究大会における「出版・企画ブース」実施報告」『文化人類学』90(3):564-568。

研究会・シンポジウム報告

「古着からみやげものへーモンの手仕事と民族性」南山大学人類学研究所 2025 年度第 1 回公開シンポジウム「中国・台湾における装いとエスニシティ」、南山大学、2026 年 2 月 20 日。

講演

「中国の「民族衣装」：雲南省ミャオ族を中心に」野外民族博物館リトルワールド 2025 年度「大人のための文化人類学講座」、野外民族博物館リトルワールド、2025 年 6 月 15 日。

「中国ミャオ族の「民族衣装」をフィールドワーク」南山大学人類学博物館 2025 年度博物館講座「ファッションの人類学」、南山大学人類学博物館、2025 年 7 月 5 日。

その他（講師）

「ワークショップ：さわって！・まもって！・なに着ましょ？」南山大学人類学博物館ワークショップ、南山大学人類学博物館、2025 年 10 月 24 日、25 日。

その他（コメンテーター）

「人間文化研究機構グローバル地域研究事業・東ユーラシア研究プロジェクト若手研究者発表会」、国立民族学博物館、2025 年 12 月 14 日。

「第 10 回まるはち人類学研究会（中部人類学談話会第 279 回例会＆第 182 回北陸人類学研究会例会）」、北陸先端科学技術大学院大学金沢駅前オフィス、2026 年 3 月 8 日。

高柳ふみ

論文

「文化的実践を記憶する——ベルリンのユースカルチャー・アーカイブを事例に」『アルケイアー記録・情報・歴史—』20:33-44。

寄稿

Vom Badehaus zum Weltraum – Katzenkultur in Japan / From the Bathhouse to Outer Space – Cat Culture in Japan, L. S. Ertener, L. Warnsholdt, J. Wild (ed.) *Katzen! / Cats!*, pp. 80-99, Museum am Rothenbaum- Kulturen und Künste der Welt (MARKK).

研究会・シンポジウム報告

「試行的来歴研究——南山大学人類学博物館のオセアニアコレクションより」国立民族学博物館共同研究会「日本人によるオセアニアコレクションの形成とモノの来歴——東大資料とみんぱくコレクションを中心に」、国立民族学博物館、2025 年 7 月 26 日。

鈴木康二

論文

「「お気に入り」探しの博物館体験～‘触る’＋‘対話’が紡ぐ「言葉」研究に向けて～」『南山大学人類学博物館紀要』(44):9-26。

黒澤浩・島絵里子・梅村綾子・鈴木康二「「さわる展示」を活用した多感覚鑑賞プログラムの企画と試行」『全博協研究紀要』(28):31-48。

共著

「実例 南山大学人類学博物館の挑戦」『博物館概論 学芸員のための理論と実践』黒澤浩（編）pp.145-147。

学会発表

「触る’＋‘対話’が紡ぐ「言葉」研究に向けて～「お気に入り」探しの博物館体験～」第 21 回日本子ども学会学術集会、秋田大学、2025 年 11 月 8 日。

研究会・シンポジウム報告

「パプアニューギニアで確認された「絵画」から考える～東ニューギニア学術調査団と沼澤喜市調査資料をもとに」南山大学人類学研究所共同研究「アーカイブズを通じた人類学史研究」、南山大学、2026 年 2 月 28 日。

「末就学児を対象とした取り組み～ミュージアムが来館者「一人ひとり」と向き合うために～」令和 7 年度古代体験研究フォーラム「遊びと博物館・美術館—幼児向けプログラムを考える—」、兵庫県立考古博物館、2026 年 3 月 27 日。

研究業績

講演

「縄文時代のくらしと土器作り」令和7年度丹波縄文の森塾、丹波の森公苑、2025年7月26日。

「縄文土器を焼く～野焼きの実践～」令和7年度丹波縄文の森塾、丹波の森公苑、2025年11月23・24日。

「ひたちなか市のすごい遺跡達～馬渡埴輪製作遺跡と虎塚古墳と十五郎穴横穴墓群と～」令和7年度ふるさと考古学、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、2025年12月14日。

「出土品から分かる！なごやの魅力～人類学博物館を訪ねて～」令和7年度後期西生涯学習センター開催講座「遺跡を学んで感じる！なごやの魅力」、名古屋市西生涯学習センター、2026年3月12日。

プロジェクト研究員

高村美也子

論文

「東アフリカにおけるデジタルマネー利用」『人類学研究所研究論集 (デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方：記録・身体・モノ)』石原美奈子・加藤英明・菅沼文乃・高村美也子 (編) (15):127-141。

寄稿

「スワヒリ語ースワヒリ語は意外と身近！？」『PIAZZA』10:24-27、名古屋外国語大学出版会。

研究会・シンポジウム報告

「タンザニア・ボンデイ女性の経済活動関する調査報告」、第5回 漁業人類学研究会、中部 ESD 拠点分室 (事務局：中部大学)、2025年10月18日。

講演

「ボンデイ族の言語と文化」、2025年度アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修、アジア・アフリカ言語文化研究所・東京外国語大学、2025年9月12日。

竹内愛

論文

「ネパール南部低地の先住民タルーのティハールー農耕を支えるモノ・動物・人・神への感謝祭ー」『Autres』14: 41-62。

研究ノート

「ネパール・ラリトプル市から日本への留学・出稼ぎーその実情と影響、国際結婚・帰国者の新たな生き方の模索ー」『共生の文化研究』20: 301-313。

書評

「書評 松井梓著 2024『海と路地のリズム、女たちーモザンビーク島の切れては繋がる近所づきあい』春風社」『年報人類学研究』(16): 207-212。

加藤英明

論文

「旧式の機械を通じてひろがる人と使用の関係：愛知の町工場の人びとによる汎用旋盤の事例より (特集「機械と人」を通して民具のいまを捉える試み)」『民具マンスリー』58(10): 17-24。

「デジタル技術を生み出す「標準化」のモノづくり：愛知県の研削加工の中小企業を事例に」『人類学研究所研究論集 (デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方：記録・身体・モノ)』石原美奈子・加藤英明・菅沼文乃・高村美也子 (編) (15): 60-70。

編著

加藤英明・菅沼文乃「はじめに」『人類学研究所研究論集 (デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方：記録・身体・モノ)』石原美奈子・加藤英明・菅沼文乃・高村美也子 (編) (15): 1-4。

共著

「ひらかれた私の研究」『わたしの学術書 2：博士論文書籍化をめぐる』春風社編集部 (編)、pp. 355-361、春風社。

寄稿

「沼澤喜市資料整理プロジェクト報告 (2024年度)」『人類学研究所通信』(25): 9-10。

研究会・シンポジウム報告

「沼澤喜市資料整理報告と今後の展望」南山大学人類学研究所共同研究「アーカイブズを通じた人類学史研究」、南山大学、2025年10月12日。

「旧式の機械を通じてひろがる人と使用の関係：愛知の町工場の人びとによる汎用旋盤の事例より」『第29回常民文化研究講座 民具を語る 17 (「機械と人」を通して民具のいまを捉える試み)』神奈川大学、2026年1月24日。

その他 (報告書)

「2.2 プラスチック加工機械」(pp. 19-26)、「5.1 ベ어링」(pp. 115-120)、「5.2 金型」(pp. 121-127)、『日本の機械産業 2025：地政学リスクの高まりのなかにある機械産業』、一般財団法人機械振興協会経済研究所。

「日本の金型産業の現状」『日本金型産業の「ブランド化」に関する検討：同産業の競争力強化に向けたプロジェクト中間報告』、pp. 12-23、一般財団法人機械振興協会経済研究所。

その他 (Works)

花井亨壮、加藤英明 (聞き手)「愛知県刈谷市にある自動車産業を支える町工場：テクノハナイの紹介を通して」『第29回常民文化研究講座 民具を語る 16 (動画配信第10回)』。

CAPOBIANCO, Paul Joseph

論文

Assessing men’s mental health in Japan: A cross-cultural comparative review study, *The Journal of Men’s Studies*. Online First.

書評

Review of Matt Artz and Lora Koycheva, *EmTech Anthropology: Careers at the Frontier*. London: Routledge, 2024. *Asian Ethnology* 84 (1): 182-184.

寄稿

Why it’s different now: Quantitative and qualitative changes to Japanese migration trends. In *No Island Is an Island: Perspectives on Immigration to Japan*. Michael Strausz (Ed.), pp. 168-186. Honolulu: University of Hawai’i Press.

学会発表

“Critical issues in men’s mental health: Cross-cultural comparisons between Japan and the West,” to be presented at the Pacific Rim College of Psychiatrists and World Association of Cultural Psychiatry Joint Conference, Tokyo, September 26.

科学研究費助成事業

渡部森哉	基盤研究（A）	古代アンデスのワリ帝国の社会構成と地方社会の実態	継続
石原美奈子	基盤研究（B）	エチオピアにおける郷土史・地方史の体系的収集・分析を通じた多元的歴史認識の解明	継続
川浦佐知子	基盤研究（C）	合衆国西部の水利権係争に働く部族主権の検討：モンタナ州水利権合意に焦点をあてて	継続
藤川美代子	基盤研究（C）	日本・台湾の「海藻食」を支えるサプライチェーンの文化人類学的研究	新規
張玉玲	基盤研究（C）	近現代日本における華僑華人の生業と生活空間に関する民族誌的研究	新規
竹内愛	若手研究	ネパールにおける女性の集合的エンパワーメントの比較研究—州レベルにおける多様性	継続
加藤英明	若手研究	機械の保全をめぐる人類学的研究：トヨタの保全の人々の技法と共同性を事例に	継続

刊行物

刊行物

- 人類学研究所（編） 『年報人類学研究』 第 16 号（2025 年 6 月 30 日発行）
- 人類学研究所（編） *Asian Ethnology*, Volume 84, Number 1 (2025 年 8 月 7 日発行)
- 人類学研究所（編） *Asian Ethnology*, Volume 84, Number 2 (2025 年 12 月 11 日発行)
- 人類学研究所（編） 『人類学研究所通信』 第 25 号（2025 年 7 月 31 日発行）
- 石原美奈子・加藤英明・菅沼文乃・高村美也子（編） 『人類学研究所研究論集』 第 15 号（2026 年 3 月 31 日発行）
- 藤川美代子（編） じんるいけん Booklet 2026 Vol.10 『「食」は世界をつなぎ、分断する ～ 食品のサプライチェーンをめぐる人類学～』（（共催）公開シンポジウム 講演録）
（2026 年 2 月 28 日発行）

Asian Ethnology Podcast

- 1, Moving Asian Ethnology to Scholastica(<https://redcircle.com/shows/c4dbd66a-37b0-4914-8cb7-a8da4745318b/episodes/9d716f76-820b-4fa4-9849-3fb88df52fbf>)
Recorded October 27 2025
- 2, When AI Trains on Our Books (<https://redcircle.com/shows/c4dbd66a-37b0-4914-8cb7-a8da4745318b/episodes/98153a06-4c7d-443d-9d7e-f2a79033ff92>)
Recorded March 16 2026

日本文化人類学会でのブース出展について

宮脇千絵（人類学研究所・第一種研究所員）

2025 年 6 月 7、8 日に筑波大学で開催された日本文化人類学会第 59 回研究大会において、新たな試みとして企画ブースが設置されることがアナウンスされた。これまでは出版社による書籍などの販売がおこなわれていたが、広い意味で文化人類学に関わる組織や団体にブース出展を促すものであり、さっそく人類学研究所でもこれにエントリーし、ブースを出展することになった。研究所の存在と活動内容を知ってもらうことが目的である。なお出展料は 5 千円である。

出展にあたっては、これまでの刊行物に加え、刊行を控えていた『年報人類学研究』第 16 号と『人類学研究所研究論集』第 15 号の目次を印刷したチラシ、2025 年度から開始した共同研究「アーカイブズを通じた人類学史研究」の紹介チラシ、そして人類学研究所で初めてとなる研究所紹介のフライヤーを準備した。チラシやフライヤーの作成、荷物の発送には事務職員の方々の協力を得た。

当日は長机ひとつ分のスペースが与えられ、そこに刊行物やチラシを並べた。それほど広くはない教室に出版社やさまざまな活動を行っているグループのブースが並び、往来する

人でごったがえす空間となった。所員で学会員の者は発表を聞きに行ったりする時間も多く、常にブースにいられるわけではなかったので、事務職員の岡村友美子さんに在席してもらった。ブースに立ち寄ってくれた方々に刊行物の紹介などをおこなうと、新たに関心を持ってくれる方も多かった。これまで発表者か参加者という立場で学会に参加してきたが、ひとつの場所に留まって往来する方々とコミュニケーションを取れるのは新たな学会との関わり方であった。



活動余話

スタッフ

人類学研究所スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授 (2025 年 9 月 16 日～2026 年 3 月 31 日)
	石原美奈子	人文学部人類文化学科・教授 (2025 年 4 月 1 日～9 月 15 日)
第一種研究所員	DORMAN, Benjamin	(外国語学部英米学科)・教授
	宮脇千絵	(人文学部人類文化学科)・准教授
	高柳ふみ	人類学博物館担当学芸員・講師
	鈴木康二	人類学博物館担当学芸員・准教授
第二種研究所員	ANTONY, Susairaj	人文学部人類文化学科・准教授 (2025 年 4 月 1 日～10 月 8 日)
	川浦佐知子	人文学部心理人間学科・教授
	CROKER, Robert	総合政策学部総合政策学科・教授
	張玉玲	外国語学部アジア学科・教授
	藤川美代子	人文学部人類文化学科・准教授
	MUNSI, Roger Vanzila	国際教養学部国際教養学科・教授
	吉田竹也	人文学部人類文化学科・教授
	RIESSLAND, Andreas	外国語学部ドイツ学科・准教授
	石原美奈子	人文学部人類文化学科・教授 (2025 年 9 月 16 日～2026 年 3 月 31 日)
	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授 (2025 年 4 月 1 日～9 月 15 日)
プロジェクト研究員	高村美也子	
	竹内愛	
	加藤英明	
	CAPOBIANCO, Paul Joseph	
	DENRONDEN, Harmony	

非常勤研究員【2025 年度】

研究課題

菅沼文乃	沖縄における老いの様相に関する人類学的研究
小坂恵敬	「パプアニューギニアを対象とした第二次世界大戦の現在への影響に関する人類学的検討」
梅津綾子	「多様な家族、子育て、性、信仰のあり方—アフリカ、ムスリム、ハウサ社会の「里親養育」慣行、および日本の LGBT ムスリムを事例に」
野澤暁子	「中世ジャワ・ヒンドゥー文化遺産の芸術人類学的研究」
辻輝之	「1. 異なるアジアの邂逅：移民の宗教・エスニシティ共生・社会関係資本 2. 紛争論再考：多宗教共存・エスニシティ共生」
PETERSEN, Esben	「The Ambivalence of Utopian Ideals in Modern Japan: Christianity's Role in Disseminating the Colonial Fairy Tale of Denmark as a Happy and Self-Sustaining Agricultural Society」
岡本圭史	「アフリカ都市の神学的思索に関する宗教人類学的研究」
廣田緑	「木版画を媒体とした現代美術の実践と社会的役割」

人間学研究所通信

人類学研究所通信 2025 年度第 26 号 2026 年 7 月 31 日刊行

編集責任者：宮脇千絵

編集委員：渡部森哉、ドーマン・ベンジャミン、
高柳ふみ、鈴木康二

組版担当者：古澤夏子

レイアウト：高柳ふみ

南山大学人類学研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

Tel.: 052-832-3111 (代表)